

音楽と 非人間

第
7
回

演奏

杉原響平

(打楽器)

2026年2月12日(木)

18:30開演(開場18:00)

会場:

トーキョーコンサーツ・ラボ

主催:

工房・寂 atelier jaku

後援: 立命館大学

本研究はJSPS科研費23K00215の助成を受けたものです

音楽と 非人間

ごあいさつ

シリーズ「音楽と非人間」第7回公演にご来場いただき、ありがとうございます。

本シリーズの最後のコンサートでは、杉原響平氏の打楽器独奏により、「音楽と非人間」という研究テーマを多様な角度から捉えた作品群を厳選してご紹介します。ここでの非人間的な音はフィールドレコーディング、自然音の描写、霊的な非人間的存在の喚起、そして非人間的な楽器そのものの能動的な共鳴を通じて探求されます。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたり、JSPS 科研費 23K00215 の助成、そして後援を賜りました立命館大学をはじめ、ご協力をいただきました各位に心より厚く御礼申し上げます。

ゼミソン・ダリル

主催者

シリーズ・コンセプト

今年度の「音楽と非人間」というコンサートシリーズは、3年間の研究プロジェクトの一環で、前近代で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学を基にして、人間の音と非人間の音の関係を新たな視点から解釈します。

作曲家たちは自然や精神的な要素との関わりを探求し、前近代の哲学や能楽の作品からインスピレーションを得ています。自然からのインスピレーションやフィールドレコーディング、伝統楽器を用いた現代音楽が交差し、不安定な時代において音楽を創り、聴き、共有する、(そして議論する)意味のある方法を定めていきます。

音楽と 非人間

プログラム

2月12日(木) 18:30 開演

演奏者

杉原響平

曲目

ゼミソン・ダリル / 霜は置くとも (B) …frost, though… (2025) 世界初演

Daryl Jamieson / Though frost settles (B) …frost, though… (2025) World premiere

エヴァ＝マリア・ホーベン / Only some sounds in the wind (2024)

Eva Maria Houben / Only some sounds in the wind (2024)

ゼミソン・ダリル / 無形種 (2022)

Daryl Jamieson / Discarnate Seeds (2022)

神山奈々 / 雷は天地つなぐ歌 (2025) 世界初演

Nana Kamiyama / When heaven meets earth in thunder (2025) World premiere

(休憩)

エヴァ＝マリア・ホーベン / Fo(u)r Timpani (2025) 世界初演

Eva Maria Houben / Fo(u)r Timpani (2025) World premiere

ゼミソン・ダリル / ミューオン (2016)

Daryl Jamieson / muons (2016)

杉原響平 / ディスタンス VI -… 雨、露、二つの花 …- (2025) 世界初演

Kyohei Sugihara / Distance VI -…Rain, dew, paired flowers…- (2025) World premiere

ゼミソン・ダリル / 霜は置くとも (A) Hoarfrosts (2025) 世界初演

Daryl Jamieson / Though frost settles (A) Hoarfrosts (2025) World premiere

音楽と 非人間

コンサート・コンセプト

「人とそれ以外のもののはざまで」

音楽（ひいては人間）と非人間という二つの領域があったとするならば、打楽器は二つの意味においてその間に位置しているのではないかと考える。

一つは、自然界と人間界の間だ。

打楽器には、「本来自然にあったものを、音が出るように加工し（あるいは加工せずそのまま）音を出す」、という原則に則った楽器たちが一定数ある。ウッドブロックやログドラムといった木質楽器がわかりやすい例と言える。それは自然界から人間界へ、一時的に（あるいは恒久的に）音を呼び出すような姿勢でもあり、同時に、あたかも森の中で鳥と獣が出会い触れ合うように、（人間さえも包括する広い意味での）大きな自然の中で自然の一部たる人間と、同じく自然の一部たる他のものたちが触れ合う姿でもある。本日の演奏会では、木の葉、石など、本来楽器とみなされない自然由来の物体も楽器として取り扱い、より直接的に自然から呼び出した音を鑑賞したい。一部の曲では、実際に自然の中で採取されたフィールドレコーディングが同時再生される。

もう一つは、人間の空想と現実の人間の間だ。

打楽器の音色は非常に印象に残るものばかりであり、時としてそれは、現実離れした強いイメージネーションを掻き立てる。この世に存在しない、何か別世界の光景を呼び出すかのような音世界を作り出すことができるのは、多様な音色を持つ打楽器の大きな強みの一つであろう。

本日の演奏会では、お馴染みの打楽器の新たな奏法を用いたり今世紀に入ってから新たに作り出された楽器を利用することで、新たな音色を獲得し、さらに深みを増した別世界の光景を楽しんでいきたい。

また一部の例外を除き、ほとんどの場面において鳴らされる音は極めて小さい。沈黙によって喚起される周囲の無数の音たちの中に置かれる、風変わりな不思議な音たちをじっくりと聞いていただきたいという願い故である。もちろん、打楽器らしいパワフルでテクニカルなサウンドを楽しむ時間も存在するため、両者の対比を楽しんでいただきたい。

余談ではあるが、本日のプログラムは休憩をはさんで前半と後半が鏡写しの対象構造となっている。鑑賞上の形式感を持たせる意味もあるのだが、自然界に多く見られるフラクタル構造を取り入れてみた結果でもある。

（杉原）

「音楽と非人間」シリーズをめぐって

ゼミソン・ダリル

このコンサートは、過去3年間にわたり私が催してきた演奏会シリーズの第7回にして最終公演に当たるものである。これらのコンサートは、非人間的な音美学と人間の音楽概念の多様な側面を探求するもので、3年間にわたる広範な研究プロジェクトの一環として、日本学術振興会の助成の下、実施されてきた。同プロジェクトには、カリフォルニア州サンタバーバラ市、スコットランドのエディンバラ市、アイスランドといった各地での講演、複数の学術出版物そして書籍（『日本美学と実験音楽』として英・ブルームズベリー社より本年9月に刊行予定）の刊行も含まれている。

本シリーズの目的は探求的・実験的なものであったため、「非人間」と「音楽」の定義自体、かなり流動的なものであった。最初の6公演はすべて九州大学の後援企画として福岡で開催されたため、ここではまず過去6公演を振り返り、それらが「音楽と非人間」という全体テーマといかに関連していたかを考察した上で、最終公演について論じたい。

なお、6公演の楽曲の一部が以下のYouTubeリンクから視聴可能である。



https://youtube.com/playlist?list=PLsbGdOzYJ_BA9HvCuGr0z95umxHKhWB8I&si=vivFDy7gq4W-aOYg

音楽と 非人間

2023年度：第1、2回公演

第1回公演は実際には2日間にわたるイベントで、フィールドレコーディングを用いた2つの長編作品を披露した。非人間的な存在という概念へのこのアプローチは、おそらく最も明白な手法であり、ほぼ「自然」な場所で録音された音源に焦点を当てるものだった。

最初の作品は上村洋一によるライブパフォーマンス「MIZU to KŌRI no RYOKŌ」である。上村が使用した音源は北海道、アイスランド、フィンランド、スイスといった世界の北の地域で上村自身が録音したものだ。気候温暖化の時代におけるこれら北の環境の脆弱性が、タイトルに示される通り、氷の音と水の音が交互に現れる作品の中で探求された。

第2曲目は、私自身の作曲によるピアノと視聴覚のフィールドレコーディングのための作品「五島（アーキペラゴ）」で、八坂公洋が演奏した。四季にわたって録音・録画したこの70分間の作品は、空海、縄文時代の精神性、隠れキリシタンに関連する五島列島の聖地群の風景を^{へめぐ}経巡るもの。ピアノスコアには、八坂がフィールドレコーディングに基づいて即興で応答した演奏の転写や、ステージ上での即興演奏が組み込まれている。自然界の非人間的な存在に加え、現代における「相互接続」と対話の意義、そして非物質的な霊や神との関係性における非人間的な存在を探求した（本作品は2026年7月26日、両国門天ホールにて東京初演を予定している）。

「五島（アーキペラゴ）」における非人間的な存在の精神的構想を基盤とした第2回公演は、晩冬にふさわしい演奏会であった。本作は星の川、水面下と野原を行き交う精霊と影をテーマにしているが、特にコンサート後半、ジョン・ケージによる2台ピアノのための「Winter Music」（冬の音楽）とヴァイオリン、チェロのための「Atlas Eclipticalis」（星図）が同時に演奏された。ピアノは後述する河合拓始のほかに西岡怜那が担当、また江頭摩耶（ヴァイオリン）、宇野健太（チェロ）の出演を得た。前半は、現代音楽・即興演奏を得意とする河合のソロ・リサイタルである。河合「イなりうた2016」より「あたごはら異聞」は稲荷山の精霊を、高橋悠治「水に走る影」は水面下の影の不可解な音を喚起する。エヴァ＝マリア・ホーベンの「constellations - consolations」（星座・慰め）はホーベンの、より個人的な夜空の印象を通し、地上の精霊から星々へと導き、後半のケージによるフィナーレへと向かう。

音楽と 非人間

2024年度：第3～6回公演

第3回公演はファビオ・ランベッリによる笙のソロ・リサイタルであった。ランベッリは前半で雅楽の曲を演奏し、後半にはケージの「One⁹」からの抜粋、私の長編作品「デスカント第1番」より「申の刻」、その他の現代作品を演奏した。本公演は非人間／音楽の繋がりにおける、特に東アジアの伝統的な精神性を焦点とした。笙は音楽の非人間（あるいは超人間）的な次元を探求するにあたり、うってつけの存在である。この楽器は中国の古代神話に登場する原初の神の一柱である女媧が、鳳凰の鳴き声を聴いて心を動かされ、それを忠実に模した楽器を作ろうと決めたことに端を発するものとされる。そのために女媧は特別な竹を採るために靈峰崑崙山へ赴き、鳳凰を模った楽器を作った。そのため、笙は人間が恣意的に作ったものではなく、神聖な存在である女媧の神意により神獣とその鳴き声を忠実に模し、靈峰で採られた材から創造されたものとも言えるのである。女神によって作られたそのオリジナルを写し、伝統を守り続けるため、人間の介入は制限されている。また笙は道教のいう仙人と仏教における極楽浄土の楽器でもある。

第4回コンサートのゲスト・アーティストはカルロ・フォルリヴェジ。この回は技術的に構築された非人間、あるいは道具としての非人間を提示するものであり、本コンサートは完全に固定された電子音楽作品のみで構成されていた。再生された作品には1960年代から現代に至るまで、近現代の幅広い時代の作曲家が名を連ねている。彼らは具体音や実際の物体、合成音声の技術、さらに様々な電子機器やソフトウェアを駆使して自らの望む表現を実現してきた。作品の演奏順ではあえて年代順を避けるようにした。これらは、あるあらずじに従うようなひとつづきのものとして演奏された。このあらずじの中では、年代の離れた作品においては電子機器の音質が著しく異なっていることも配慮され、時間的な隔たりに過度に意識が向かないようにされている。量子的なメタファーを構築したとも、時代的な位置取りよりも音楽的オブジェクトにエネルギーを見出すことを優先した、とも言えよう。本プログラムにはフォルリヴェジの4つの作品が組み込まれている。これらはそれぞれ非人間の別の側面に係わるものであり、当初からプログラムに組み込みたいと考えていた。1997年から2017年の間、ポンピドゥ・センターのIRCAMやオーフスのDIEM、ラジオ・フランスのINA-GRMといった様々なハイテク・スタジオで作曲されたそれらを、フォルリヴェジは自身に通じるコンセプトを持つ作曲家たちの作品の間に挟み込んでおり、それらがこのコンサート・テーマを代表するようものとなっている。マルコ・ストロッパ、ジョナサン・ハーヴェイ、近藤譲、そしてゼミソンの作品が演奏されたほか、マックス・マシューズの曲も取り上げられた。コンピューター・プログラミングを

音楽と 非人間

用いて人間の声を模倣することを考案・探求した、電子音楽の先駆者、先見の明を持った科学者・芸術家として我々がプログラムに入れたかった人物である。

最後の2つのコンサートでは器楽による西洋音楽に（大部分が）戻った、と言える。

第5回コンサートでは、ヴィオラ奏者の赤坂智子がバッハの組曲と私の作品「デスカント第4番」を演奏した。18世紀初頭を中心に活躍したヨハン・セバスティアン・バッハは、構造的・数学的な完全性を目指す音楽が宇宙におけるキリスト教的变化に寄与すると信じており、その考えは彼の音楽全般、特にヴィオラで演奏される組曲に表れている。この曲を記述し、演奏し、聴くことで、私たちは、ひいてはこの世界は、より完全で魅力的なものになる、というのである。「デスカント第4番」では、ヴィオラ奏者も環境の一部として耳を傾ける。この曲では世界の完全性を追求したり、世界を変えようとするのではなく、世界に溶け込み、その一部になろうとするのである。

伊佐治哲大による第6回公演のプログラムは、18世紀のチェンバロ作品と彼自身の即興演奏で構成された。啓蒙思想家や科学者たちの一部、例えばドニ・ディドロはチェンバロを「人間の鏡」であると定義づけ、それが人間の「エスプリ（魂）」を体現するものと考えた。チェンバロの外箱は人間の「身体」であり、弦はその「神経・筋肉」に相当する。「エスプリ（魂）」は外箱（身体）と弦「神経・筋肉」の共鳴が生み出す音と捉えるわけである。言い換えると、人間性そのものは「非人間的」な要素の共鳴から発生するものであったのだ。この楽器とその弾き手が「一心同体」になると人間でも楽器でもない、ケンタウロスの如き不思議なハイブリッドに変化する感覚を覚えることもある。当時の弾き手や作曲家がチェンバロを通し「人間の領域」を超えようとしていたのは確かだ。チェンバロはバッハの手によって音楽を通した信仰を体現する道具と化し、ラモー、クーランの場合は言葉にしようがない物質的な世界を超えたフェノメナを描くキャンヴァスであった。

本コンサート (2025 年度)

さて本日の公演、この3年間のシリーズの最終公演を迎えた。これまでの多くの公演同様、本公演も人工の道具（即ち、楽器）という形の非人間の音の作り手と、自然環境における非人間生物の録音（フィールドレコーディング）の双方を取り上げる。打楽器のいくつかは、パーカッション奏者である杉原氏が叩いたり撫でたり刺激したりするといった以外の加工をほとんど施されていない、自然素

音楽と 非人間

材そのものに過ぎない。一方ティンパニのような打楽器は、人間の音楽的要求に応えるために何世紀にもわたって洗練された装置である。とはいえ、物体も音同様に独自の生命を宿している。本公演では2曲（第2回公演で演奏された作曲家エヴァ＝マリア・ホーベンの「Only some sounds in the wind」と私の作品「ミューオン」）にフィールドレコーディングが用いられ、シリーズ最初期の作品で焦点化されていたフィールドレコーディングへの回帰を示している。自然の音楽的喚起というテーマは第2回の公演でも探求されたもので、このことは神山の「雷は天地つなぐ歌」と杉原の「ディスタンス VI.-... 雨、露、二つの花 ...-」に現れる。神山の作品はまた、非人間的な存在の精神的あるいは宗教的な側面をも喚び起こす。

私の新作委嘱作品（本プログラムの全作品は「ミューオン」を除いて杉原氏からの委嘱作である。うち4曲は世界初演）は「霜は置くとも」と題するもの。この題名は柿本人麻呂の和歌（「さをしかのつまとふ山のをかへなるわさ田はからししもはをくとも」『新古今集』第459）から採ったものである。詩に描かれる前景の音は、その名の通り霜が秋の野原に降りる音。この極めて繊細なサウンドイメージは、ティンパニのための静謐な音響世界によって喚び覚まされる。しかしその背後にはここに登場する甲高い鳴き声を上げる小牡鹿だけでなく、和歌の伝承において「小牡鹿」という言葉に結びついた意味の連鎖が存在する。そこには孤独、恋慕、冷たさ、そして秋そのものが含まれよう。私にとっての個人的な連想は、以前箏のために書いた「小牡鹿」という作品であり、これは2013年に作曲された。非人間的な自然界の音響イメージの彼方には、詩的・美的世界の集合的・文化的無意識が存在する。楽器（チェンバロ等）同様に、詩は人間によって作られる（あるいは、例えば「ミューオン」で使われている石や葉、小枝のように、人間が拾い上げる）かもしれないが、詩はまた集合的に、社会・文化・美学の複合体（所謂アーキペラゴ、星座）へと蓄積され、個々の芸術家や文化媒体を超越し、景観そのものを形作る。私たちが非人間的な世界によって形作られるのと同様に、私たちがまたその世界を形作っていると言えるのである。

この相互的な連関性は、ある意味で、この一連のリサーチの結論として、少なくとも人間が聴き、考え、あるいは想像しうる限りにおいて、非人間的な音など存在しないということを示してもいる。万物の相互連関性（即ち、華嚴仏教や禅の根本原理である「事事無礙法界」）の本質は、あらゆる音が同時に人間的であり非人間的であり、音楽（人間の解釈者によって音楽として音楽として鑑賞されるという意味におけるそれ）であり非音楽であることを意味する。我々の非人間的想像は、単に鏡 - 反響 - に過ぎず、自らを映し返しているに過ぎないのである。

音楽と 非人間

プログラムノート

ゼミソン・ダリル / 霜は置くとも (2025)

Daryl Jamieson / Though frost settles (2025)

この作品は 2025 年、《新古今集》のイメージに基づいて作曲しているシリーズのうちの一つである。本作品のタイトルと主要なイメージは、柿本人麻呂の和歌から採られている。二つの楽章は連続して演奏されないことが求められており、したがって本コンサートではプログラムの最初と最後に配置されている。

(ゼミソン)

エヴァ・マリア・ホーベン / Only some sounds in the wind (2024)

Eva Maria Houben / Only some sounds in the wind (2024)

この作品は、私のとても親しい友人である杉原響平に捧げられています。私はしばしば友人たちのために——作曲の際にその人を演奏者として思い描きながら——作品を書きます。この曲では、さまざまな長さの音が示されます。音が現れ、消えていくこと、それらがとても重要な意味を持っています。ただ果てしなく続く音の流れのなかで、あらゆる種類の音が立ち現れることが許されます。そこから私たちは、時間が無効化され、相反するもの同士が同時に存在するような状態を想像することができます。作曲家として私が望んだのは、「作品」を作るのではなく、空間をひらくこと、特定の状況を呼び起こすことでした。動くこと、呼吸すること、関係を結ぶこと、互いに触れ合うこと——そのための場を。この作品が、関わるすべての人々に「不思議に思うこと」を促してくれたなら、私は幸せです。驚きをもって聴き、見つめること。そこから生まれた考えやヴィジョン、夢が、日常生活へと指し示されていくかもしれません。

(ホーベン 杉原訳)

音楽と 非人間

ゼミソン・ダリル / 無形種 (2022)

Daryl Jamieson / Discarnate Seeds (2022)

この作品は、2022年春に出雲での二つの迫力ある聴覚体験に基づいている。一つ目は日御碕神社の境内にある小さな林の、出雲に最もゆかりのある複雑にして強力な神スサノオを祀る神社の近くにおいてであった。井戸のある空き地に、私はじっと立っていた。潮風が周囲の木々の種を揺らし、生命を維持する小さな粒が、そば降る音のような、またそれとも違う音を立てて私の周りに降り注いだのである。翌日、この作品を委嘱した杉原氏の案内で、私は鱈淵寺と浮浪の滝を訪れた。この滝は、緑色の苔に覆われた湿った岩の緩やかな傾斜の上に、繊細な水の流れを落としていた。今まで見たことも聞いたこともないような滝で、これらのサウンドスケープが、この作品の種となったわけである。

(ゼミソン)

神山奈々 / 雷は天地つなぐ歌 (2025)

Nana Kamiyama / When heaven meets earth in thunder (2025)

円環状の配置は結界となり、演奏者はその内側でスサノオの荒ぶる力を引き受ける。本作は、出雲神話における雷と鎮めの物語を、音と間によって再構成する試みである。雨と風の祝福を受け、稲妻が走るとき、それは天地を往還する呼吸となり、やがて歌へと変わる。荒々しさと美しさがせめぎ合いながら立ち上がる音の儀式である。本作は、委嘱者であり緊密な協働を実現してくれた信頼するティンパニストの杉原響平氏に捧げる。

(神山)

音楽と 非人間

エヴァ・マリア・ホーベン / Fo(u)r Timpani (2025)

Eva Maria Houben / Fo(u)r Timpani (2025)

この作品は複数のページからなる作品で、使用する楽器、変化するダイナミクス、打奏位置、マレットの種類などが示されています。そこには意外性のある変化とともに、ごくわずかな音色の変化や、細部に宿る微細なニュアンスも含まれています。

この曲はティンパニという楽器の素材そのもの、その本質に焦点を当てています。ここで投げかけられる問いはきわめて根源的です——ティンパニとは何か？

そのため、物語的な要素が前面に出ることはなく、あくまで素材の性質そのものが立ち現れます。作品の出発点となったのは、雨がさまざまな地面や金属板の上に降り注ぐときの印象でした。自然は物語を語るのではなく、ただ示すだけ。——そこにあるがままに。

(ホーベン 杉原訳)

ゼミソン・ダリル / ミューオン (2016)

Daryl Jamieson / Muons (2016)

太古の昔から人類は万物の基本的元素、つまり世界の構成単位がどんなものであるか、考え続けてきた。初期の古代ギリシャ人たちはそれを四大元素（地・風・火・水）に集約した。仏教における宇宙論にも同様の四大元素が見られるが、そこにもう一つ「空」という要素が付け加えられている。それから数千年にわたって人類はこの概念をさらに突き詰め、より小さく、分割不可能な元素に近づこうとしてきた。素粒子ミューオン（「ミュー粒子」、または「 μ 中間子」とも）こそが、現在の所最小にして分割不可能な元素とされている。毎秒数えきれないほどのミューオンが人間の身体、万物を通り抜けているのだ。この作品で私は初めてフィールドレコーディングを用いた。文明はそれ自身を包括する生態系にダメージを与え続けているが、人間活動が自然に与える顕著な悪影響を知るにつれ、私は人間と自然に関する作品をより多く書くようになった。この曲で用いられる打楽器は、ほとんど全て自然物から作られたものである。レコーディングの音源の多くは都市の中の緑地、例えばウィニペグ（カナダ）、トンヨン（韓国）、ロンドン、日野（京都）、鎌倉で採集されたが、これらはいずれも歴史的な大事件が起こったところである。自然の音が豊かに聞こえる、しかしそれだけではない場所。

この「ミューオン」という曲では、人工音と自然の音が混ざり合っている。鎌倉五山の禅寺、その庭

音楽と 非人間

で録音した鹿威しししおどの音が本曲のタイムキーパーでもあるのだが、その静寂に満ちた空間の中で、演奏者は石を用いてキツツキくちばしの嘴の作り出す執拗なリズムを真似る。別に録音された自然音とその打楽器パートにだんだん加わっていく。そのサウンドスケープもまた全く人工音なし、というわけではない。自然音と人工音を必要以上に区別するのは、人間が自分たちを持ち上げすぎているが故の意識ではないだろうか。人間もまた動物ではないか。人間が為したことで自然と呼べないものがあるだろうか。そして自然を環境を破壊するという事は、単に我々自身を破壊することに他ならないのではないか。

(ゼミソン)

杉原響平 / ディスタンス VI -... 雨、露、二つの花 ...- (2025)

Kyohei Sugihara / Distance VI -...Rain, dew, paired flowers...- (2025)

モートン・フェルドマンの打楽器作品「デンマークの王」への回答、というコンセプトで始まった「ディスタンス」シリーズも6曲目となった。風鈴は自分の打楽器作品にかなりの割合で登場するのだが、従来の「風鈴を吊るしてそのまま鳴らす」という用法からさらに進んで、風鈴の舌と短冊を外し奏者が鈴本体をマレットで演奏する、という用法を採用した。風鈴一特に私自身が愛してやまない南部風鈴を直接叩いたときに奏でられる音を初めて聞いたとき、真っ先に思い起こされたのが、鈍色の空の下、霧雨とも小雨ともつかない雨が終わることなく降る中、道端に咲いたすみれの花びらの上に光る露の鈍い輝きのイメージだった。10の風鈴たちが織り成す不思議な光の輝きは、鈍く淡いながらも明瞭に雨の存在を喚起してくれる。この雨粒たちの中に、ある2人の作曲家へのオマージュがそれぞれ織り込まれているのだが、もし誰の事かお気づきになったとしても、何卒胸の内に秘めていただけたらと願うものである。

(杉原)

音楽と 非人間

プロフィール

杉原響平 / Kyohei Sugihara (打楽器および作曲)



1992 年生まれ。

2011 年に東京音楽大学に入学し、2012 年より、オランダのマー
ストリヒト音楽院 (Conservatorium Maastricht) に入学。

在学中よりリュブリャナ・インターナショナル・ユース・オーケ
ストラなどの複数のオーケストラ活動に参加。2018 年に同音楽院
を卒業後、広島交響楽団など、日本の各オーケストラにて客演を行
う。また、ソリストとしても活動しており、2018 年 9 月に出雲市
にて、2024 年 9 月に雲南市にてソロリサイタルを行う他、2019
年から 2022 年まで、出雲楽友協会主催のチャペルコンサートに参
加し、委嘱作品や自作曲を取り入れたソロコンサートを行った。

これまでに打楽器を、佐藤真由美、照沼滋、久保昌一、村瀬秀美、
Raymond Curfs、Pieter Jansen、Mark Haeldermans、森洋太、

岡田全弘の各氏に師事。また、打楽器の演奏の他にも作曲活動を行っている。

音楽理論を Jan Ezendam に師事した他は、ほぼ独学で作曲を学ぶ。作品は特に日本とオランダを中心
に、国内外の演奏会で演奏の機会に恵まれている。作品の多くは日本の伝統音楽や宗教的儀式に触発さ
れており、規則的な拍節運動によらない、「浮遊する時間」への強い興味に基づいたものが多い。

2017 年と 2018 年には、マーストリヒトにて自作曲の個展を行っている。

音楽と 非人間

ゼミソン・ダリル / Daryl Jamieson (作曲およびフィールドレコーディング)



カナダ・ハリファックス生まれ。オンタリオ州ウォーターローにあるウィルフリッド・ローリエ大学のグレン・ビューアー氏、リンダ・カトリン・スミス氏から最初の音楽的訓練を受ける。その後渡英、ギルドホール音楽演劇学校でダイアナ・バレル氏に師事。ヨーク大学ではニコラ・レファニュー氏の下で研鑽を積む。文部科学省の奨学生として来日後、東京藝術大学の近藤譲氏に作曲などを学んだ。第3回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。受賞作品は「日本の歴史と変遷にまつわる深い考察に基づく壮大な音楽作品として、きわめて格調の高い、今日的視点を持った内容」と評された。

ゼミソンの作品は一般に時空間に対する鋭い感覚に支えられているが、能や日本の伝統音楽（特に箏曲）、詩歌からはわけても強い影響を受けており、現在は音楽的時間と歌枕の心理－地理学に興味

を寄せている。また近年、サイト・スペシフィック・アートやフィールドレコーディングへの関心も深めており、それが《歌枕》シリーズや《デスカント》シリーズに結実している。

代表作に《ヴァニタス》3部作、モノオペラ《松虫》(2014年)、音楽演劇《フォーリングス》(2016年)、和楽器五重奏のための《憂きこと聞かぬところありや》(2017年)などがある。

作品はボツィーニ弦楽四重奏団、Orchestre National de Lorraine、アンサンブル室町、アルノルト・シェンベルク室内楽団、シン・エッジ・ニュー・ミュージック・コレクティヴ、ピアノの井上郷子氏や八坂公洋氏、箏のマクイーン時田深山氏らによって幅広く演奏されている。

現在、ミュージック・シアター「工房・寂」のアーティスティック・ディレクターを務めるほか、東京を拠点とした国際的な作曲家集団 Music Without Borders の設立メンバー、また世界中の若手作曲家の作品を日本の聴衆に届けることを目指して活動するトリオ mmm…の共同設立者・招聘作曲家でもある。2022年には、近藤譲氏の著書『聴く人 homo audiens 音楽の解釈をめぐって』を英訳した。これらに並行して研究、執筆活動も精力的に行っており、目下執筆中の現代音楽と日本の美学に関する著書 Experimental Music and Japanese Aesthetics: Silence, Nature, and Hollow Listening (『実験音楽と日本美学----サイレンス、自然、そして「虚」聴』)が英国・ブルームズベリー出版社より2026年に刊行予定である。カナダ・カウンスル、日本学術振興会、文部科学省などからの助成多数。

音楽と 非人間

エヴァ＝マリア・ホーベン / Eva-Maria Houben (作曲)



フォルクヴァング芸術大学(エッセン)で音楽教育を学び、オルガンをギースベルト・シュナイダーに師事した。彼女は音楽学の博士号と大学教授資格を取得し、ゲルハード・メルカトール大学(デュイスブルク、現デュイスブルク・エッセン大学)とロベルト・シューマン大学デュッセルドルフで講義を行った。1993年から2021年2月28日まで、ホーベン教授はドルトムント大学の「音楽・音楽学研究所」で彼女の焦点である音楽理論と現代音楽の両方を講義した。現在に至るまで現代音楽、その作曲家、伝統音楽に関する多くの書籍が出版された。彼女は30年以上オルガンの演奏を続けている。また、作曲家集団「ヴァンデルヴァイザー楽派」のメンバーであり、その作品は「エディション・ヴァンデルヴァイザー」(ハーン)から刊行されている。

彼女の作品一覧にはオルガン、ピアノ、クラリネット、トロンボーン、チェロ、その他多くの独奏楽器のための作品、声楽とピアノのための作品、管楽器や室内合奏、オーケストラ、声楽とオーケストラ、合唱曲、電子音楽のための作品が含まれる (www.wandelweiser.de)。

神山奈々 / Nana Kamiyama (作曲)



東京音楽大学大学院修士課程を主席で修了。作曲を有馬礼子、西村朗、細川俊夫の各氏に師事した。2023年に行われた世界最大の作曲コンクールであるバーゼル作曲コンクールでは、日本人女性として初めて3位入賞を果たした。武満徹作曲賞(2013)、第79回日本音楽コンクール等の受賞歴もある。作品は、オーケストラを主軸としてウィーン・トーンクンストラ管弦楽団、バーゼル室内管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団等、著名な演奏家によりドイツ、オーストリア、スイス、フランス、など内外で演奏されている。近年は、コンクール課題曲や合唱分野の委嘱も多く年間7-8曲を制作。武生国際音楽祭では、作曲ワークショップアシスタントを務める。東京音楽大学講師。

音楽と
非人間